

はじめに

これからの時代に必須の知識

マイクロソフトの創業者ビル・ゲイツが「銀行は将来必要なくなる」と発言したのは1994年でした。その言葉が現実化しつつあるように、金融の世界は大きな変化の波に洗われています。バンク（bank）という言葉は、古代ローマ帝国時代から使われていたラテン語のバンコ（banco）に由来することからもわかるように、銀行は長い間、人類の経済活動を支え、重要な役割を果たしてきました。しかし近年、フィンテックと呼ばれる新たな技術により、これまで銀行が担ってきた金融のあり方が大きく変わりつつあるのです。

銀行の業務とされてきた預金と貸金、為替（振込・送金）は、いずれもフィンテックのサービスとしてできるようになっています。さらに銀行の付加価値業務とされる支払管理、会計仕訳、運用支援、セキュリティの分野にも新たな技術がどんどん入り込んでいます。金融がデジタル化されれば、お金はネットワークを介してやり取りされる情報となり、この扱いを得意とするIT企業が既存の金融機関が担ってきた金融分野に新たなプレーヤーとして続々と進出しているのです。

仮想通貨の登場も社会に大きなインパクトをもたらしました。投機的な急騰があり、資産1億円を達成したことを意味する「億人」という言葉が躍ったのは記憶に新しいところでしょう。仮想通貨が旧来の貨幣に取って代わる存在になるかはまだわかりませんが、少なくともこれを実現したブロックチェーンという技術が非常に大きな可能性を秘めていることは間違いありません。

フィンテックの影響が及ぶ範囲は広く、その知識は、これからの時代を生きていくうえで必須のものといえます。

本コースは、フィンテックとは何か。どのように発展してきたか。政府はどのように対応しているかを解説します。また、これまで金融機関が行ってきた決済や送金のサービスが大きく変わろうとしていること、会計革命と呼ぶべき変化が起こりつつあることをご紹介します。さらに仮想通貨やブロックチェーンについても解説します。

金融のみならず、経済社会や政治、そして企業のビジネス戦略にまで変化をもたらすかもしれないフィンテックの潮流について学んでください。

目次とスケジュール

それではテキスト学習に入ります。途中で投げ出したりしないために、計画を立ててから取り組みましょう。自分自身のペースに合わせて無理のない計画を立てましょう。

1日2項目を学習するのが平均的なスケジュールです。

□は、診断で間違ったところやこれは特に重要だ、覚えておきたいという項目をチェックするために使いましょう。

章	内 容	P	予定日	終了日
1	フィンテックのインパクト	10		
	<input type="checkbox"/> 1「フィンテック」とは	10	/	/
	<input type="checkbox"/> 2金融にとどまらないフィンテックの影響	11	/	/
	<input type="checkbox"/> 3フィンテックによる「破壊的」変化	12	/	/
	<input type="checkbox"/> 4フィンテックを支える技術	13	/	/
	<input type="checkbox"/> 5保険のテクノロジー化「インステック」	14	/	/
2	フィンテックの誕生と発展	15		
	<input type="checkbox"/> 6金融危機から生まれた潮流	15	/	/
	<input type="checkbox"/> 7起業をうながすエコシステム	16	/	/
	<input type="checkbox"/> 8利用者の視点の重視	17	/	/
	<input type="checkbox"/> 9異なるシステムをつなげるAPI	18	/	/
	<input type="checkbox"/> 10オープンAPIの進展	19	/	/
3	世界のフィンテック事情	20		
	<input type="checkbox"/> 11圧倒的な投資が行われた米国	20	/	/
	<input type="checkbox"/> 12中国の巨大プラットフォーム	21	/	/
	<input type="checkbox"/> 13新興国のフィンテック関連企業	22	/	/
	<input type="checkbox"/> 14途上国のフィンテックは「かえる飛び」	23	/	/
	<input type="checkbox"/> 15ヨーロッパにおけるフィンテック	24	/	/
4	日本政府の対応	25		
	<input type="checkbox"/> 16日本政府のフィンテックにおける取り組み	25	/	/
	<input type="checkbox"/> 17キャッシュレス社会に向けた動き	26	/	/
	<input type="checkbox"/> 18フィンテック推進のための法整備	27	/	/
	<input type="checkbox"/> 19銀行と一般事業会社で異なる規制問題	28	/	/
	<input type="checkbox"/> 20不正防止や利用者保護の取り組み	29	/	/
5	日本のフィンテック	30		
	<input type="checkbox"/> 21日本の金融の技術レベル	30	/	/
	<input type="checkbox"/> 22日本のフィンテック事情	31	/	/
	<input type="checkbox"/> 23三大メガバンクの動き	32	/	/
	<input type="checkbox"/> 24日本の大手IT企業の動き	33	/	/
	<input type="checkbox"/> 25日本の金融事業の特徴	34	/	/

目次とスケジュール

章	内 容	P	予定日	終了日
6	キャッシュレスの普及	35		
	<input type="checkbox"/> 26 先行したクレジットカードの需要	35	/	/
	<input type="checkbox"/> 27 交通系と買い物系の電子マネー	36	/	/
	<input type="checkbox"/> 28 日本の電子マネー事情	37	/	/
	<input type="checkbox"/> 29 ポイントでキャッシュレスを促進	38	/	/
	<input type="checkbox"/> 30 EC サイトの新たな決済方法	39	/	/
7	モバイル決済	40		
	<input type="checkbox"/> 31 IC カードの仕組み	40	/	/
	<input type="checkbox"/> 32 米国で伸びた少額決済のビジネス	41	/	/
	<input type="checkbox"/> 33 日本でのモバイル決済事業の展開	42	/	/
	<input type="checkbox"/> 34 QR コードのスマートフォン決済	43	/	/
	<input type="checkbox"/> 35 モバイル決済のさまざまなメリット	44	/	/
8	データセキュリティ	45		
	<input type="checkbox"/> 36 本人確認とセキュリティの重要性	45	/	/
	<input type="checkbox"/> 37 パスポートにも採用された IC チップ	46	/	/
	<input type="checkbox"/> 38 データセキュリティの新たな技術	47	/	/
	<input type="checkbox"/> 39 生体認証によるデータ保護	48	/	/
	<input type="checkbox"/> 40 進む顔認証の実装	49	/	/
9	フィンテックの多様なサービス	50		
	<input type="checkbox"/> 41 航空機や鉄道の電子チケット	50	/	/
	<input type="checkbox"/> 42 企業間の決済サービス	51	/	/
	<input type="checkbox"/> 43 迅速で格安な海外送金の方法	52	/	/
	<input type="checkbox"/> 44 個人間のお金のやり取り	53	/	/
	<input type="checkbox"/> 45 企業の信用度合いをはかる新たな手法	54	/	/
10	新たな融資手法	55		
	<input type="checkbox"/> 46 見直される銀行の融資と投資のあり方	55	/	/
	<input type="checkbox"/> 47 インターネットを介した資金調達	56	/	/
	<input type="checkbox"/> 48 クラウドファンディングの種類	57	/	/
	<input type="checkbox"/> 49 借り手と貸し手をマッチングするサービス	58	/	/
	<input type="checkbox"/> 50 ソーシャルレンディングのリスク	59	/	/
	<input type="checkbox"/> 添削課題		/	/

目次とスケジュール

章	内 容	P	予定日	終了日
11	与信とビッグデータ	62		
	<input type="checkbox"/> 51 与信リスクの管理	62	/	/
	<input type="checkbox"/> 52 貸付を決める AI スコアリング	63	/	/
	<input type="checkbox"/> 53 決算書に頼らない格付け	64	/	/
	<input type="checkbox"/> 54 ビッグデータが注目される理由	65	/	/
	<input type="checkbox"/> 55 与信に活用されるライフログ	66	/	/
12	仮想通貨とは	67		
	<input type="checkbox"/> 56 電子マネーと仮想通貨の違い	67	/	/
	<input type="checkbox"/> 57 ビットコインの登場	68	/	/
	<input type="checkbox"/> 58 ビットコインの基本的な仕組み	69	/	/
	<input type="checkbox"/> 59 仮想通貨を守るウォレット	70	/	/
	<input type="checkbox"/> 60 仮想通貨をめぐる問題	71	/	/
13	ブロックチェーンの仕組み	72		
	<input type="checkbox"/> 61 ブロックチェーンのつなげ方	72	/	/
	<input type="checkbox"/> 62 マイニングを行うマイナー	73	/	/
	<input type="checkbox"/> 63 マイナーが行う競争の内容	74	/	/
	<input type="checkbox"/> 64 データ量の増大に対応する技術	75	/	/
	<input type="checkbox"/> 65 クラウドサービスとの違い	76	/	/
14	仮想通貨の新たな展開	77		
	<input type="checkbox"/> 66 仮想通貨の限界	77	/	/
	<input type="checkbox"/> 67 ビザンチン障害と 51%問題	78	/	/
	<input type="checkbox"/> 68 仮想通貨の新しい証明方法	79	/	/
	<input type="checkbox"/> 69 仮想通貨は通貨たりえるか	80	/	/
	<input type="checkbox"/> 70 政府や自治体、金融機関の仮想通貨	81	/	/
15	ブロックチェーンの可能性	82		
	<input type="checkbox"/> 71 応用範囲が広がるブロックチェーン 3.0	82	/	/
	<input type="checkbox"/> 72 参加者を限定したクローズド型	83	/	/
	<input type="checkbox"/> 73 クローズド型の可能性	84	/	/
	<input type="checkbox"/> 74 契約の自動化「スマートコントラクト」	85	/	/
	<input type="checkbox"/> 75 広がるブロックチェーンの応用範囲	86	/	/

目次とスケジュール

章	内 容	P	予定日	終了日
16	会計の革命	87		
	<input type="checkbox"/> 76 不正会計をブロックチェーンで防ぐ	87	/	/
	<input type="checkbox"/> 77 業務を一変させるクラウド型会計ソフト	88	/	/
	<input type="checkbox"/> 78 クラウド会計のデータを融資に活用	89	/	/
	<input type="checkbox"/> 79 業務を効率化するクラウド型請求書	90	/	/
	<input type="checkbox"/> 80 個人資産を管理する PFM	91	/	/
17	資産運用のロボットアドバイザー	92		
	<input type="checkbox"/> 81 株式の自動売買	92	/	/
	<input type="checkbox"/> 82 個人向け自動売買ツールの登場	93	/	/
	<input type="checkbox"/> 83 煩雑な資産運用をロボットで自動化	94	/	/
	<input type="checkbox"/> 84 ロボットアドバイザーの特徴	95	/	/
	<input type="checkbox"/> 85 金融系と独立系のロボットアドバイザー	96	/	/
18	経済活動の変化	97		
	<input type="checkbox"/> 86 シェアリングエコノミーの発展	97	/	/
	<input type="checkbox"/> 87 シェアリングのユニコーン企業	98	/	/
	<input type="checkbox"/> 88 フリマサービスの成長	99	/	/
	<input type="checkbox"/> 89 新しい社会を作る IoT とフィンテック	100	/	/
	<input type="checkbox"/> 90 クリエーター活動の支援	101	/	/
19	技術革新がもたらす社会	102		
	<input type="checkbox"/> 91 フィンテックは社会をどう変えるか	102	/	/
	<input type="checkbox"/> 92 日銀のフィンテック対応	103	/	/
	<input type="checkbox"/> 93 金融システムのクラウドへの移行	104	/	/
	<input type="checkbox"/> 94 データエコノミーの今後	105	/	/
	<input type="checkbox"/> 95 5G のインパクト	106	/	/
20	フィンテックの未来	107		
	<input type="checkbox"/> 96 AI の急速な進化	107	/	/
	<input type="checkbox"/> 97 現行のコンピューターの限界	108	/	/
	<input type="checkbox"/> 98 キャッシュレスの落とし穴	109	/	/
	<input type="checkbox"/> 99 フィンテックは仕事を奪うか	110	/	/
	<input type="checkbox"/> 100 フィンテックの未来	111	/	/
	<input type="checkbox"/> 添削課題		/	/



第1章～第10章

キャッシュレス決済・融資編

「フィンテック」とは

学習のポイント

POINT ① フィンテックは「金融」と「技術」からなる造語。

POINT ② キャッシュレス化の推進や仮想通貨の登場が注目されるきっかけに。

最近よく耳にするようになったフィンテック（FinTech）とは、金融（Finance）と技術（Technology）を組み合わせた言葉です。技術とはコンピューターやインターネットなどに関連するIT（Information Technology：情報技術）やICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）のことであり、金融サービスと技術を組み合わせたさまざまな動きを示す言葉として用いられています。

さまざまなサービスや商品を含む、かなり広がりのある概念であり、そのことが理解を難しくしているといえるでしょう。ときにはフィンテックの事業を行うベンチャー企業の総称として用いられることもあります。ITやICTを駆使して革新的な金融サービスを提供するベンチャー企業というイメージです。

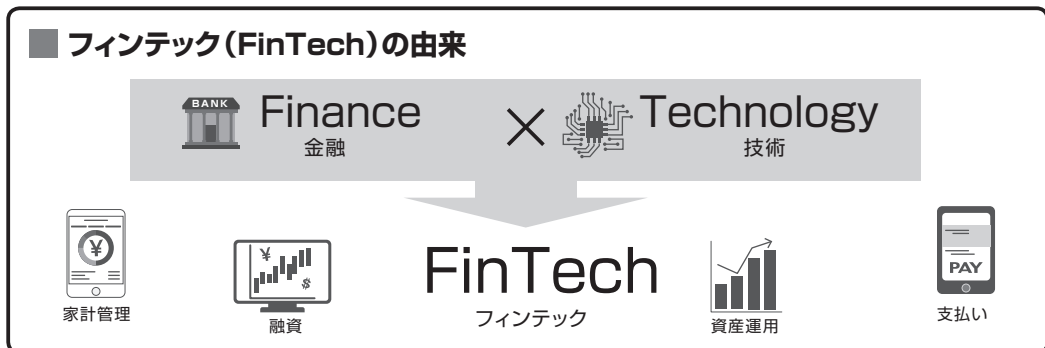
米国でフィンテックという言葉が初めて使われたのは1972年という説もありますが、少なくとも2000年代前半から用いられていました。同国におけるフィンテックの代表的なサービスの1つとみなされるオンライン決済のPaypal（ペ

イパル）が設立されたのは1998年のことです。

もちろん日本でも銀行などの既存の金融機関が以前からITを活用してきましたが、金融庁の金融審議会「決済業務等の高度化に関するワーキング・グループ」の報告書（2015年）で改めて「ITを活用した革新的な金融サービス事業を指す」としたほか、今や政府全体の方針である「未来投資戦略2018」にもフィンテックが盛り込まれています。

フィンテックがこれだけ注目されるようになった理由として、政府をあげてキャッシュレス化を進めようとしていることや、ビットコインなどの仮想通貨の価格の高騰が社会現象になり、それを実現した技術であるブロックチェーンの可能性や重要性が広く認識されるようになったことがあります。仮想通貨とは、暗号化された取引データを分散して管理する仕組みのことで、低コストでサービスを提供することができるうえ、改ざんしにくく、不正を見破りやすいという特長があります。

■ フィンテック (FinTech) の由来



1

フィンテックのインパクト

金融にとどまらないフィンテックの影響

学習のポイント

POINT ① 決済や送金、融資などフィンテックのサービスにはさまざまある。

POINT ② フィンテックの市場規模は拡大している。

ひと口にフィンテックといっても、そのサービスにはさまざまな種類があり、決済や送金、資金の貸し手と借り手の仲介、個人のお金に関する情報を統合的に管理するサービス、投資のアドバイスをしてくれるロボットアドバイザーなど金融サービスのほとんどの領域に広がっています。

かつて金融サービスといえば、銀行の窓口で行うものでしたが、今やスマートフォン1つあれば、買い物の決済、送金、割り勘、仮払いや予約、請求までできるようになっています。

世界のフィンテックの市場規模は2020年に563兆円に達するという予測があります。この数字は、個人金融（消費者貸出プラットフォーム・自動投資サービス）、ビジネス金融（売掛債権買取プラットフォーム、クラウドファンディング、ビジネスレンディングプラットフォーム）、デジタル決済（オンラインP2P送金、モバイルウォレットPOS決済、オンライン決済）の取引額の合計です。

銀行の伝統的な業務とされるのは、預金と融

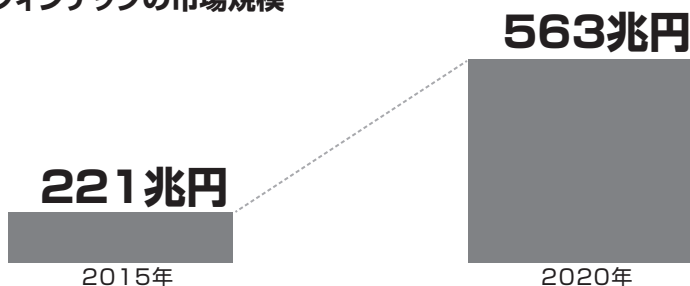
資、為替（決済）ですが、このうち融資は低金利政策が続いていることもあり、あまり利益を出せなくなっています。そこにフィンテックの潮流が押し寄せて、IT企業などがこれらの業務に参入しています。さらに金融機関の付加価値サービスである預金管理、資産運用、会計管理にもフィンテックが応用されるようになっており、こうした変化のなか、既存の金融機関は対応に迫られているのです。

フィンテックの普及の影響を受けるのは銀行だけではありません。証券や保険の業務も大きく変わろうとしています。

さらにフィンテックを実現するブロックチェーンという革新的な技術は、シェアリングサービス、サプライチェーン、公共データ、電子カルテ、ヘルスケアなどさまざまな分野で応用ができる大きな可能性を決めた技術です。

インターネットの登場以来とも称される革新的な技術が、今まさに私たちの生活、仕事のあり方を大きく変えようとしているのです。

■ 拡大するフィンテックの市場規模



出典:state

フィンテックによる「破壊的」変化

学習のポイント

POINT ① 欧米では「ネオバンク」と呼ばれるフィンテックの事業者が登場した。

POINT ② フィンテック事業者と既存の金融機関の関係性は変化してきた。

オーストリアの経済学者ヨーゼフ・シュンペーターは「新しいものを生産する、あるいは既存のものを新しい方法で生産すること」をイノベーションと定義し、企業家（アントレプレナー）が、既存の価値を破壊して新しい価値を創造していくこと（創造的破壊）が経済成長の源泉である、としています。

フィンテックは、その革新性から既存の金融機関を破壊するイノベーションのようにとらえられることがあります。

欧米では新しいビジネスモデルで既存のビジネスを破壊する企業をディスラプター（Disruptor）と呼びますが、革新的なサービスを行うフィンテックの企業が登場し、急速に事業を拡大すると金融機関を脅かすディスラプターと見られることになったのです。

インターネットやスマートフォン、クラウドコンピューティング、ビッグデータなどの新たな技術を活用することにより、決済や融資、送金、資産の運用・管理など、これまで銀行など

の金融機関が独占的に行ってきた業務を肩代わりするフィンテックの事業者が続々と登場しています。当然ながらコンピューターは人間より早く、正確に作業を処理できます。またスマートフォンさえあれば、サービスを提供できるので店舗やATMも不要です。

フィンテックを活用することで金融サービスを、より便利に、より低コストで、より迅速に提供する事業者のことを欧米では、新しい銀行の形ということから、ネオバンク（NeoBank）とも呼びます。

金融機関など既存の大企業もフィンテックがもたらす革命的な変革に逆らえなくなり、フィンテックがもたらす脅威、あるいは可能性に気づき、フィンテック企業と連携するなどの対応を進めています。

フィンテックは既存の金融機関と対立構造で語られることがありますが、欧米ではネオバンクと銀行が契約を結び、顧客に新しい金融サービスを提供するようになっています。

■ ネオバンクの例

預金 サービス手数料が無料など

主なネオバンク



貸出 融資型のクラウドファンディング、モバイル融資など

DWOLLA
venmo

送金 P2P決済サービスなど

LendingClub
affirm

フィンテックを支える技術

学習のポイント

POINT ① IT、ICTの飛躍的な進化がフィンテックを実現させた。

POINT ② スマートフォンがフィンテックの発展に大きな役割を果たした。

1969年に人類を月面に送り届けた米国のアポロ計画で用いられた誘導用コンピューターは、わずかファミコン2個分の能力だったそうです。20世紀の中ほどに誕生したコンピューターは、驚くほど急速な進化をとげてきました。

フィンテックの画期的サービスを実現し、支えているのがコンピューターであり、インターネットやサーバー、スマートフォン、タブレット端末などの技術です。

フィンテックの隆盛には、ネットワークを介してサーバーやストレージなどを活用するクラウド（Cloud）の技術が大きく貢献しています。スタートアップ企業は、クラウドを利用すればインフラに莫大な投資をせず、思いついたアイデアをビジネス化できるのです。

また、フィンテックの普及は、携帯可能な小型のコンピューターである移動体通信端末の進化なしには考えられません。

なんといっても画期的だったのが、2007年にAppleが米国で発売したiPhoneと、Mac OS Xか

ら派生したiPhone OS（現iOS）を搭載し、アプリケーションのインストールは公式WebサイトのApp Storeを経由するというそのシステムです。iPhoneはプラットフォームとして機能することにより、アプリケーションの開発を促し、簡単な操作により、さまざまなことができるようになりました。ハードウェアも代を重ねるごとに性能が向上しています。こうして米国製や韓国製のスマホは日本の市場を席巻し、日本製の携帯電話を隅に追いやるかっこうになりました。

日本だけでなく、光ファイバー網などの通信インフラが十分に整備されていなかった国でもモバイルの通信基地がどんどん設置され、スマートフォンは世界中で急速に普及しています。

スマートフォンやインターネットの普及により、お金のやり取りをするのに現金や店舗、ATMが不要になりました。利用者は利便性が高まり、金融機関はコストを削減できます。これらが両輪となり、フィンテックの推進力となっているのです。

■ 主な国のスマートフォン使用率

日本	64.0%	カナダ	76.0%	スペイン	87.0%
韓国	92.0%	ブラジル	67.0%	スウェーデン	88.0%
中国	83.0%	イギリス	77.0%	ロシア	61.0%
サウジアラビア	96.0%	フランス	71.0%	南アフリカ共和国	60.0%
オーストラリア	87.0%	ドイツ	75.0%		
アメリカ	78.0%	イタリア	76.0%		

出典：「世界40カ国、主要OS・機種シェア状況
【2018年3月】」アウンコンサルティング(株)

保険のテクノロジー化「インステック」

学習のポイント

POINT ① フィンテックにより保険の業務にも変化が表れつつある。

POINT ② 個々の加入者のデータを保険料に反映するサービスもある。

保険の分野にもフィンテックの影響が及び、新たなサービスが始まっています。こうした現象を表すものとして、Insurance（保険）にTechnology（技術）を組み合わせたInsTech（インステック）という言葉が使われています。

日本の保険会社各社は膨大な顧客データを抱えるIT企業（プラットフォーム）との連携を進め、商品の開発やサービスの開発に取り組んでおり、加入の仕組みや事故対応、決済の方法など保険が大きく変わろうとしています。

例えば、加入者のデータを保険料に反映するサービスが登場しました。保険の本質的な問題とされることに「逆選択」と「モラルハザード」があります。逆選択とはリスクの高い人ほど自発的に保険契約したがることで、モラルハザードとは保険があることに安心して危険を冒してしまうことを意味する言葉です。

顧客のデータを収集すれば、きめ細かく、より的確に保険料を設定することができます。自動車に専用端末を取り付け、スマートフォンの

アプリケーションと連携して、急ブレーキ、急発進の回数などを測定して運転の安全性を判断して保険料を決めるサービスがあります。このように運転技術などから事故のリスクを予測し、優良ドライバーの保険料を割引くことをテレマティクス保険といい、日本でも大手損害保険会社を中心に導入が始まりました。テレマティクス（Telematics）は、テレコミュニケーション（Telecommunication：遠距離通信）とインフォマティクス（Informatics：情報工学）からの造語です。

海外にはウェアラブル端末を利用して加入者の歩数や消費カロリーなどを追跡・記録する仕組みをつくった保険会社もあります。加入者がよく歩いたり、食べ過ぎに注意したり、日頃から健康の維持に努めていけば、病気のリスクが低くなると判断し、保険料を割引くことで、健康管理のインセンティブにつなげようという保険商品です。

■ インステックの3つの領域

インステックの分野には、ヘルスケア、保険の引き受け、マーケティングの3つの領域があるといわれる。



金融危機から生まれた潮流

学習のポイント

POINT ① リーマンショックが金融機関に対する消費者の信用を揺るがせた。

POINT ② 米国ではリーマンショックにより金融の人材がITの分野に移った。

フィンテックが飛躍する1つのきっかけとなったのが、2008年に起きたリーマンショックでした。

リーマン・ブラザーズという米国の大手投資銀行が、サブプライムローンと呼ばれる高リスクの住宅ローンで損失を計上し、処理に失敗、9月15日に事実上破産します。この負債総額64兆円という米国市場最大の倒産を引き金として連鎖的に世界規模の金融危機が発生しました。信用が何より大切な金融システムに対する不安が広がってしまったのです。この世界的な金融危機を、日本ではリーマンショックと呼びます。

危機から立ち直ろうとした金融機関は大規模な人員整理などのリストラを始めます。特に、米国では多くの人々が金融界を追われることになりました。当時、日本のテレビでも荷物を抱えてウォール街の高層ビルを追い出される人々の映像がニュースで流れたものです。

もちろん当時の金融機関もITを活用してい

たため、システム部門を含め、多くの人員が職を追われることになりました。その結果、米国では金融業界にいた技術者たちが大挙してIT業界に転職し、ITと金融を融合させた新たなサービスを生み出したのです。

こうしてリーマンショックという世界的な危機を経て、インターネットやスマートフォン、AI（Artificial Intelligence：人工知能）などを活用したサービスを提供する新しい金融ベンチャーが次々と登場することになりました。

また、リーマンショックを受け、米国では金融機関に対する不信感や反感が広まり、生まれたときからデジタル環境があるミレニアル世代（Millennials）が中心となって、スマートフォンで利用できるフィンテックの金融サービスを盛んに利用するようになりました。こういった背景もあり、当初、既存の金融機関に対抗する概念としてフィンテックという言葉が用いられることがあったのです。

■ リーマンショックの影響

住宅バブル崩壊

2008年9月15日

リーマン・ブラザーズが経営破綻



世界中の景気が悪化

米国 ●金融大手が公的管理に

●自動車メーカーが破綻

欧州 ●ギリシャが財政破綻

日本 ●戦後最悪のマイナス成長

各国の中央銀行が
金融緩和政策、
各国政府も財政
出動をする